

# 連珠っておもしろい

## 六段 高川悌二

### ●番外編● 連珠の強さについて

今回、河村九段に変わって高川が「連珠の強さ」について書かせていただく。最近、あまり実戦を打つ機会が少なくなり、もっぱらハンゲームで適当に遊んでいることが多くなった。そのせいかわからないうが、実戦でなかなか勝てなくなってしまう。

局面がどんなに悪くても何とかしのいで、終わってみれば結局勝っている、という人がいるが、こういう人が本当に強いと思う。有利な局面に持っていかけても結局勝ち切れずに、逆転負けが多くなっているのは結局、弱いと言うことだろう。最近の対局譜を2つ紹介する。最初の譜は、昨年12月の京都連珠会定例会で長谷川名人と京都リーグを打

った譜である。京都リーグは昨年から題数指定打ちで行っている。仮先は長谷川名人で名月3題打ちを指定した。名月は実戦ではあまり打たないので、黒を選択しても責めつづれば見えてくる。そこで以前河村九段と研究した白の作戦があり、長谷川名人にぶつけてみようとうと白を選択した。有名な名月1間飛び(名月嵐月共通系)の変化である(図1参照)。

この変化は、斎藤本にも記述されているが、細かい変化手順までは網羅されていない。

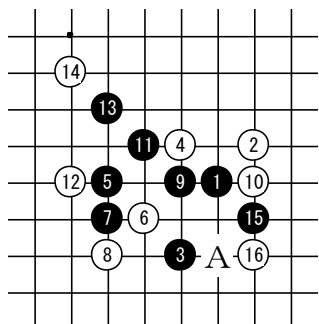


図1. 1~16まで

この16が、今回の作戦で

ある。最強はAとされるがこの変化も難しい。結局のところ、ほぼ黒勝ちであるのだが、実戦一番読み切るのは困難である。

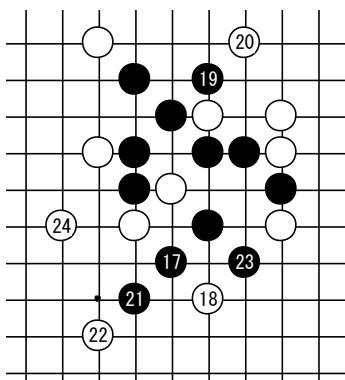


図2. 17~24まで

手なりに進み、この24が第二の作戦。剣先を止めるとともに、黒21の斜めのラインが夏止めになる。

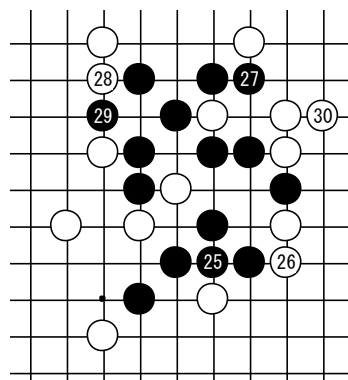


図3. 24~30まで

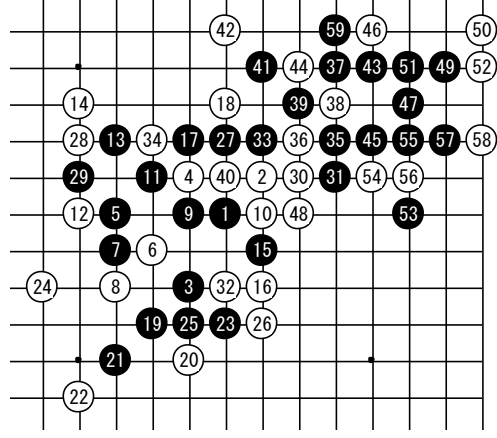
黒としてはA(図3)に

打ちたいが、三々禁になる上部のあやを生かして27と打ち、三々禁を解消してA、Bと打つ作戦である。しかし、ここで白30の第三の作戦があったのである。上部の黒のあやを防ぎつつ、Aと打たれても、先にCと打たせることにより、長連で防ぐことができる。ここまでは最初からの作戦で、思い通りであった。

しかし、この後の研究は何もしていなかったため、実はここからが問題であった。

黒は白の剣先を押さえ、その後一気に攻め立てられ、黒59にて白投了となった。何とも致し方ないのであるが、よくよく考えてみると、白32は一旦35と引いてみるとか、白42では一旦43と引くことにより、展開は大きく変わっていただろう。結局、研究不足から詰めめのが甘さが露呈してしまった。

黒勝名人長谷川一人  
白 六段高川悌二  
黒 59にて白投了



ところで、この16の作戦について以前河村九段と研究したと最初に書いたが、そのときの变化を紹介するために上部に展開したが、実は黒27からいきなり追い詰めの手があるのだ。  
図5の白28で攻めが途絶えそうだが、そのまま勝ちが出る。

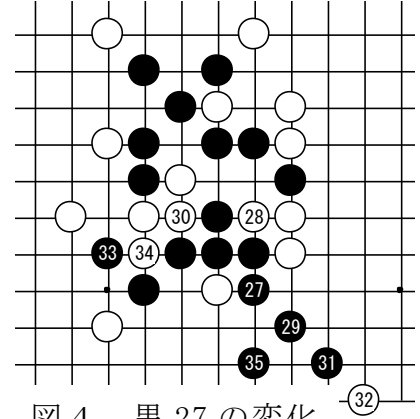


図4. 黒27の変化

この白16の作戦を浅草連珠会で小野孝之三段に掛けたら、図4の変化図よりもっと短い手順で追い詰められてしまった(研究の詳細は本人から伝授してもらって下さい)。  
もう1局紹介する。これは第21期王位戦予選で飯尾七段に掛けられた手である。

松月転地止めの白10の変化で、この変化についても斉藤本にも出ていないが、やはり詳細はわからない。実は10年ほど前に大井耕三五段とのEメール通

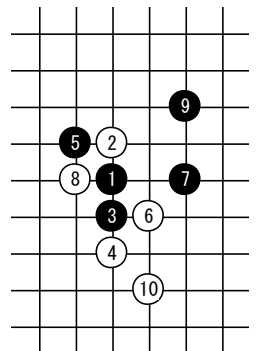


図5. 白10の変化

信戦で、この変化を研究したことがあり、そのときの結論は黒勝ちであった。しかしほとんど手順に記憶がなく勝ちは見えない。実戦譜の黒31が敗着であった。ここはAと見せてから攻める手があった。

黒 六段高川悌二  
白勝七段飯尾義弘  
白38にて黒投了

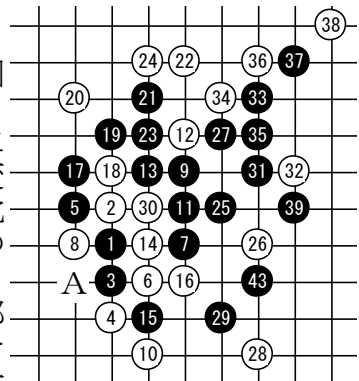
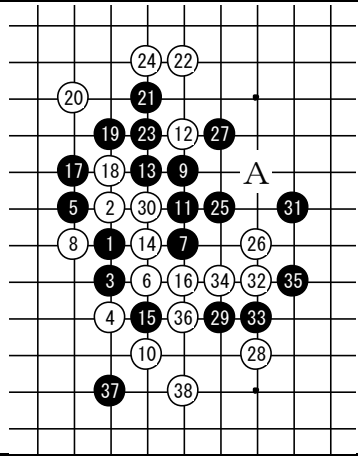


図6. 31の変化

図6に変化の1部を示している。いろんな変化があるので、皆さん研究してほしい。

最近、この変化に目をつけ勝ちまくっている連珠家がいるらしい。むかし「ニコチンガララ」と呼ばれたという噂もある。その作戦は、この黒勝ちを見越して、白16で先にAと引いておく手だ。そうすると黒27の引きが成立しないという、極めて高級な技である。  
やはり、強い連珠家はより深く研究しているものだとつくづく感じる。そしてそれでこそ実戦1番勝ち切る実力がついてくると思う。